

# 読み取りエンジンをBREWで提供 バージョンアップで新コードにも対応可能

カメラ付き携帯電話の新しい活用法として2次元コードを読み取るアプリケーションに注目が集まっている。メディアシークは、この機能をBREWアプリとしてKDDIに提供、開発期間の短縮や新サービスの展開にもつなげている。

今や大半の携帯電話に搭載されるようになったカメラ機能だが、その新しい活用法として注目を集めているのが、2次元コード(QRコード)読み取り装置としての活用だ。

昨年から対応端末の投入が本格化し、名刺に2次元コードを刷り込んでおき、携帯電話をかざすだけで電話帳へ氏名、電話番号、住所などを入力できるようにする、あるいは情報誌などに店舗や企業のURLを2次元コードで掲載して、これを携帯電話で読み取り自動的にその携帯サイトにアクセスできるようにするなどの使われ方も広がってきている。

この機能は、一般には携帯電話のネイティブアプリケーションに読み取りエンジンを組み込む形で実現されているが、BREWを携帯アプリサービスの主力として展開するKDDIでは、今年1月から読み取りエンジンとアプリケーションの双方をBREWで携帯電話に搭載する形で、2次元コードと1次元コード(JANコード)への対応を開始した。

こうした展開が可能になったのは、ネイティブアプリケーションの開発を効率化することを目的に開発されたBREWが、携帯電話対応Javaに比べ起動や動作速度が早く、さらに異なったアプリケーション間でエンジン(エクステンション)を共用できるなどの特徴を持つ



株式会社メディアシーク  
執行役員・サービス開発事業部長  
清水憲忠氏

ているためだ。

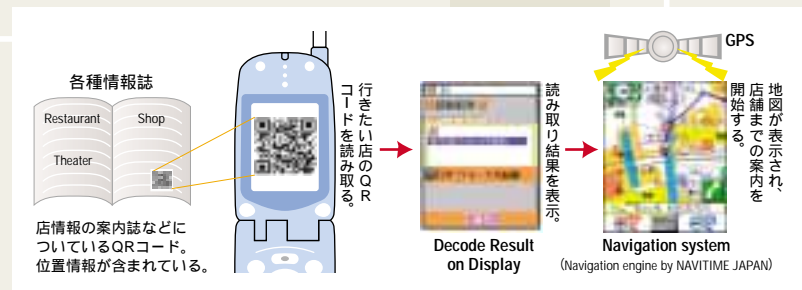
現在、A5502K(京セラ製)、A1402S(ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズ製)、A5505SA(三洋電機製)A5506T(東芝製)に、2次元コードと1次元コードを読み取り、その情報を電話帳に登録する、URLやメールと連携するなどの機能を持つ「2次元コードリーダー」が搭載されている。

## ナビゲーションサービスとの連携も

この「2次元コードリーダー」の開発を担当したのが、モバイルコンテンツ配信事業とともに携帯電話関連システム開発に力を入れる有力コンテンツプロバイダー、メディアシークだ。

同社は、2000年の設立当初からモバイルソリューションビジネスの柱の1つとしてPDAや携帯電話に外

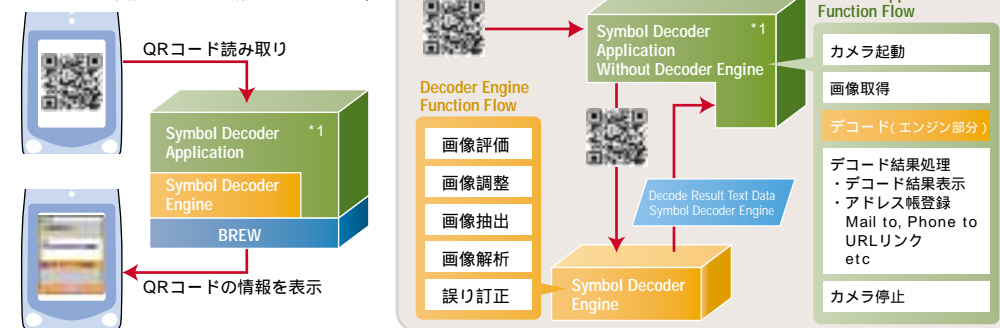
付けするバーコードリーダーを活用するシステムの提案に力を入れてきたが、この種の装置の導入にはユーザーの抵抗感が強いことから、打開策としてカメラ付き携帯電話に2次元・1次元コードリー



サービスイメージ: ナビゲーション連携

## Symbol Decoderの技術概要

Symbol Decoder(読み取りアプリ)は2つのテクニカルレイヤーから構成されている。アプリケーション部分を開発することにより、様々なサービスで利用することができる。



\*1: 基本的に、Symbol Decoderは同じプラットフォーム、OSの携帯電話であれば、端末ごとのカスタマイズは必要ない。しかし、端末によりカメラの仕様異なる場合は、カメラ仕様にあわせたアプリケーションのカスタマイズが必要となる。

ダー機能を搭載することを発案、社内でも開発を進めていた画像処理技術を応用して製品化に乗り出した。2003年初めには、同社の技術を搭載した第1号端末が発売された。

同社の技術は、読み取り速度や精度、特に印刷がかすれたものや携帯電話のカメラで読み取る際に問題になる画像のゆがみの自動補正などの点で評価が高く、現在では、2次元コード読み取り機能を搭載した携帯電話の6~7割に同社の技術が使われているという。「2次元コードリーダー」の読み取りエンジンは、これらのPDC携帯電話のネイティブアプリケーション向けに開発したエンジンをBREWに移植したものだ。

「2次元コードリーダー」の開発を担当したメディアシーク、サービス開発事業部長の清水憲忠氏は、BREWでのソフト開発にはいくつかのメリットがあるという。同氏がまず挙げるのが、ネイティブアプリ用に開発したソフトの移植が非常に容易であることだ。「同じC言語で開発されていたこともあり、移植作業は1カ月程度で完了した」という。

もう一つは、プリインストールで提供したソフトをダウンロードすることによって、新バージョンに容易に更新することができることだ。これにより、新コードへの対応なども可能となる。

さらに、ビジネス展開上の利点として大きいのが、他のBREWアプリケーションとの連携による新システムの開発が可能なことだという。

一例が、今年6月にKDDIが提供を開始した歩行者向けナビゲーションサービス「EZナビウォーク」と「2次

元コードリーダー」の連携システムだ。これは、情報誌などに目的地の緯度、経度情報を2次元コードで掲載しておき、これを携帯電話で読み取ることでナビゲーション機能を利用できるようにするもの。EZナビウォークではGPS機能で現在位置を特定できるため、2次元コードの読み取りだけで、携帯電話によるナビゲーションが受けられるのだ。メディアシークでは、このサービスを実現するためにA5506Tに搭載された「2次元コードリーダー」の最新バージョンでEZナビウォークとの連携機能を追加している。

メディアシークでは次のターゲットを、この技術をコアとしたトータルソリューションの展開に置いている。清水氏は「今後フィールドワークや宅配業者の伝票入力を携帯電話の2次元コード読み取りで行うシステムなど、企業向けソリューションの提供も行っていきたい」という。

さらに同社では、この技術の海外展開にも積極的に取り組んでおり、すでに、模造品を排除するためのトレースシステムを展開している北京の企業から、「現在、電話やショートメールで行なっている製品番号による真贋の照会を携帯電話のバーコード読み取り機能で効率化できないか」という、日本では考えられないような相談案件も舞い込んでいるという。

BREWのアプリケーションは海外のCDMA2000/cdmaOne携帯電話上でも共通に使えるだけに、BREW上での「2次元コードリーダー」の開発を手掛けたことは、同社の海外ビジネスの可能性を広げることにもつながりそうだ。